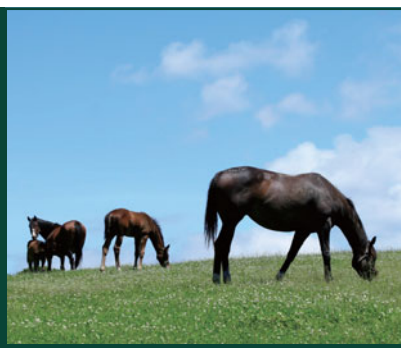


馬産地ライター村本浩平の 2021 スタリオンシリーズ競走種牡馬名鑑

Vol. 2 | 6.22[火] ▶ 7.29[木] 開催分



6.24
[木]

モズアスコット賞
【栄冠賞(H2)】

新種牡馬

今や「二刀流」という言葉は、投打に渡って優れたパフォーマンスを残すロサンゼルス・エンゼルスの大谷翔平選手の活躍によって、誰もが知る言葉となった。競馬でも芝とダートという、異なったカテゴリーのG1レースを勝利したのがモズアスコットである。デビュー時は芝でレースを使われながらクラスを上げていき、4歳時には前走の安土城Sからの連闘でGI安田記念を優勝。しかもこの時の勝ち時計である1分31秒3はレースレコードタイとなった。6歳時には初ダート戦となったGⅢ根岸Sを優勝して臨んだGIフェブラリーSも優勝。芝、ダートの双方でGIを制したのは史上5頭目の快挙ともなった。本年度からスタッドインすると、オールラウンダーな現役時の活躍と、Frankelの後継種牡馬という血統背景も評価されて、シーズン早々に配合申し込みは満口となっている。

6.29
[火]

タワーオブロンドン賞
【グランシャリオ門別スプリント(H2)】

新種牡馬

父に欧州を代表する名マイラーのRaven's Passを持つタワーオブロンドン。牝系を紐解くと皐月賞馬のディーマジェスティや、英・愛ダービーの勝ち馬で、種牡馬として日本で繋養されたジェネラス。そして、世界6か国でGI9勝をあげた「鉄の女」ことトリプティックの名前も見つけ出すことができる。その血統の良さに加え、父から受け継がれたスピード能力は芝のマイルとスプリントで遺憾なく発揮されていく。2歳時にはGⅡ京王杯2歳S、3歳時にはGⅢアーリントンCと重賞タイトルを積み上げていき、本格化を迎えた4歳時にはGⅡ京王杯SC、GⅡセントウルSの双方でレコード勝ち。スプリンターズSもスピードの違いを見せつけるようなレース内容でGI初制覇を果たす。本年度からスタッド入りし、世界的な良血を背景に生産界でも人気を集めている。

7.13
[火]

ノーブルミッション賞
【星雲賞(H3)】

新種牡馬

全兄は現役時にGI10勝を含む14戦14勝、種牡馬としても世界各国でグレードレースの勝ち馬を送り出しているFrankel。そして自身も現役時は21戦9勝、うちGIで3勝と血統背景に違わぬ活躍を残したのがノーブルミッションだ。兄Frankelが芝のマイル戦を中心とした活躍を見せたのに対し、ノーブルミッションが得意としていたのが芝の中長距離。特に5歳時は全てグレードレースに出走して7戦5勝、2着2回という安定した成績を残して、この年のカルティエ賞の最優秀古馬にも選出。ラストランとなった英GI英チャンピオンSでは兄Frankelとの兄弟制覇も果たしている。引退後はアメリカで繋養され、今シーズンから日本での繋養をスタート。その血統背景もさることながら、自身の競走成績からしても、産駒にはクラシックディスタンスでの活躍が期待できそうだ。

7.15
[木]

シニスターミニスター賞
【ノースクイーンカップ(H2)】

現役時は13戦して2勝ながら、初勝利となった未勝利戦では2着に8馬身差。そしてケンタッキーダービーの前哨戦となる米GIブルーグラスSでは、2着に12馬身3/4差という記録的な圧勝劇を見せたのが、シニスターミニスターである。現役引退後の2008年から日本で繋養され、初年度産駒たちはダートを中心に安定した成績を残していく。2年目産駒となるインカンテーションがGⅢレパードSを優勝して以降は種牡馬としての人気も急上昇し、それに答えるかのように中央、地方を問わず、毎年のように重賞馬を送り出していく。産駒は門別競馬場との相性も良く、後にJpnIJBCクラシックも制したヤマニンアンプリメがJpnⅢ北海道スプリントC、コーラルツッキーがJpnⅢエーデルワイス賞を優勝。昨年もラッキードリームがJpnⅢJBC2歳優駿を制している。

7.22
[木・祝]

サトノクラウン賞
【王冠賞(H2)】

サトノクラウンの父は、日本でも繋養されたラストタイクーンの後継種牡馬となるMarju。世界各国で活躍馬を送り出したラストタイクーンを彷彿とさせるかのように、Marjuもまた、長きに渡る種牡馬生活の中で、多くのグレードレースウイナーを送り出していく。その中でも日本での代表産駒となったサトノクラウンは、2歳秋のメイクデビューを勝利すると、その年の暮れにはGⅢ東京スポーツ杯2歳S、3歳時にもGⅡ弥生賞を優勝。クラシックとは縁が無かったものの、4歳緒戦となるGⅡ京都記念を制すると、その年の暮れに行われた香港ヴァーズでGI初制覇。5歳時にもGⅡ京都記念を連覇して、GI宝塚記念では国内でのGI制覇を果たす。芝中距離での安定した競争成績や配合のしやすさもあって、繋養初年度となる2019年には207頭の繁殖牝馬を集めてみせた。

7.27
[火]

ジャスタウェイ賞
【ブリーダーズゴールドジュニアカップ(H1)】

人気漫画「銀魂」のアイテムからその名を付けられたジャスタウェイであったが、競走馬としてもファンから人気を集めただけでなく、世界にその名を轟かすような名馬ともなっていた。2歳時にメイクデビューを快勝。3歳時にもGⅢアーリントンCを勝利するも、競走馬としての真骨頂は、4歳で初GI制覇を果たした天皇賞・秋からの重賞4連勝と言える。その中でもUAEG1ドバイデューティーフリーでは、2着に6馬身差を付けた上にレースレコードで優勝。レース後の国際クラシフィケーションでは130ポンドの評価が与えられ、日本産馬としては史上初の単独1位となった。初年度産駒から芝やダート、そして距離を問わずにグレードレースの勝ち馬を送り出し、ついに昨年のGIホープフルSで、ダノンザキッドが産駒初となるGI制覇を果たしている。

今シーズンは特別競走17レースも
「スタリオンシリーズ競走」として開催!

- 門別6回・ヤマカツエース賞・ポアゾンブラック賞 初年度産駒デビュー
- 門別7回・クリエイターⅡ賞・アニマルキングダム賞

「スタリオンシリーズ競走」は、一般社団法人JBC協会(ジャパンブリーダーズカップ協会)が産地の支援を得て、優勝馬の馬主や生産者に種牡馬の翌年種付権利を副賞として贈呈する競走です。

※生産牧場が海外の場合は付与対象外となります。

